

巻頭言

杏林大学保健学部理学療法学科  
跡見 友章

VUCA（ブーカ）という言葉を目にされたことはあるだろうか。Volatility（変動性）、Uncertainty（不確実性）、Complexity（複雑性）、Ambiguity（曖昧性）から構成された頭字語であり、近年では、特に予測困難な時代を表す言葉として用いられている。例えばCOVID-19は、わずか数カ月ほどの間にパンデミックと言われる世界的な流行となった。また、この原稿を書いている2022年の2月には、ロシアによるウクライナへの大規模な侵攻が開始されている。これらはいずれも、予測や判断が専門家の中でも大きく分かれたことから、予測困難性が高い時代の象徴的な出来事といえるだろう。そしてこのような予測困難性に対応するため、スマートフォンやインターネットなどに代表されるICTの世界的な発達によって、個人から社会レベルにおけるデータの収集や解析が今までと比較にならないほど短い時間で可能になったことを背景に、人工知能のアルゴリズムに代表されるデータサイエンスの活用が期待されている。

一方で、私たちがよりよい人生を生きるうえで不可欠な普遍的価値を有するものがあるとするならば、私たちの生命や健康は間違いなくその中に含まれる。わが国においては、世界的に前例のない少子超高齢社会への突入とそれに対する対策は、予測の難しさがあがり、かつ喫緊の対応が求められる課題の一つといえるだろう。2016年に日本で出版された「LIFE SHIFT—100年時代の人生戦略」の中でも、著者であるリンダ・グラットンが「前例のない長寿化の中で人生をより良く生きていくためには、過去のロールモデルが役に立たない」ことに加え、新たなモデルの中心には「金銭的資産だけでなく、肉体的・精神的健康や、友人や家族との良好な関係などの見えない資産がより重要」になると述べている。

人工知能は万能ではなく、問題解決につながる解を出すには、妥当性や精度が高い変数の設定が必要となる。つまり、私たちが予測困難な状況でよりよい人生を生きていくために、ICTによって収集したデータを適切に用いるとするならば、経済合理性を中心とした身体的、心理的、社会的強者の視点のみではなく、一人一人の生命や健康の問題に丁寧に向き合う視点が含まれなくてはならない。今後、医学や保健学に期待される重要なことの一つは、専門性の高い基礎的な知見の積み重ねに加え、地に足をつけた実直で丁寧な臨床の取り組みを、人間の生命や健康に対する尊重と理解をもって、医学・保健学的な視点で指標として提示していくことであろう。

杏林大学には、附属病院と医学部を中心に保健学部や文系学部があり、またデータサイエンスの活用にも力を入れるなど、臨床と基礎における専門性の高い重要な知見を分野横断的につなげることができる環境がある。杏林医学会誌が、この充実した環境を活かした魅力的な内容となるように、編集委員として微力ながら力を注ぐ所存である。会員の先生方におかれましても、引き続き奮って雑誌への投稿をお願いする次第である。